

## 論文の内容の要旨

論文題目 中世キリスト教世界の〈叫び〉  
——「敬虔な女性たち」と一般信徒をめぐって

氏名 後藤 里菜

本論文は、中世キリスト教世界で、〈救い〉と〈罪〉の双方と深く関わっていたにも拘らずこれまで主題となることが稀であった〈叫び〉を、研究対象として取り上げたものである。その成果として以下の三点が挙げられる。

第一に、宗教的なく叫び〉の意味・役割から、中世ヨーロッパの信仰世界をこれまでにない形で照らし出した。

第二に、〈叫び〉の意味・役割の変容を、盛期中世以降の新たな〈靈性〉の担い手であった「敬虔な女性たち」および、一般信徒たちの集団的な宗教運動に注目しながら明らかにした。

第三に、それら全体の試みにより、盛期中世から中世終わりにかけての、人間と神との関わり方の大きな変化を〈叫び〉を通して浮き彫りにした。

第一の成果は、第一章によるもので、修道院の戒律や慣習律、修道士の伝記・著作、聖人伝、エクセンプラ集や奇跡譚、異界探訪譚など、多岐にわたる史料を、各々の先行研究に基づきながら〈叫び〉の観点から繋ぎ合わせた。その結果大きく三つの特徴を見出すことができた。

第一に、中世世界で悲鳴や〈泣き叫び〉などを含む音声を伴う激しい〈叫び〉には、〈罪〉や悪魔の存在を示す「しるし」としての役割が大きかったことである。聖人はその激しい〈叫び〉を〈祈り〉や聖性で消滅させることができた。そこで〈叫び〉は「消滅する」ことによって、聖性の「存在」を示す役割を果たした。

第二に、音声を伴う〈叫び〉は一般信徒にとっては、〈救い〉に繋がる中心的な手段であったことである。決まった〈祈り〉やイエス・キリストおよび聖母マリアの名前を「叫ぶ」こと、ならびに聖人に自らの願いを〈感情〉とともに「叫ぶ」ことは、そのまま〈救い〉をもたらした。また、一般信徒は悪魔憑きとなり、聖人の存在やその意図を「叫んで」明らかにすることで、〈救い〉に繋がる役割を果たすこともあった。

第三に、紀元千年頃まで神とより近い生活を独占していた修道士たちにとっては、〈沈黙〉こそが美德であり、音声を伴う〈叫び〉は、一見、積極的な役割を持たなかったが、人間が神に対して祈り讃える行為を示す言葉は、音声の有無に拘らず「叫ぶ」(“clamare”)であり、その事実が様々な側面で浮かび上がっていたことである。とくに顕著に表れたのは、修道院の典礼的な儀式「叫び」(“clamor”)においてであり、その儀式では人間が神に対して身を低め小声でへりくだった後、激しい大声で訴える〈叫び〉が、効果的に作用した。

本論文の第二の成果は、第一章を基盤としながら、第二章と第三章で行った考察によるものである。第二章では、12世紀後半以降に出てきた新たな〈霊性〉である、〈身体〉と〈感情〉を通じて神と関わる方法の担い手であった「敬虔な女性たち」の伝記に焦点を当てた。伝記から読み取ることのできる、彼女らが〈叫び〉にもたらした発展は大きく四つ挙げられる。

第一に、神への〈祈り〉としての〈叫び〉に対し、一般信徒に見られた〈感情〉のままの〈叫び〉を加え展開させたことである。神への内的な〈祈り〉にも「叫ぶ」(“clamare”)の語が用いられ続けたが、それに加えて〈救い〉への実感や神の存在への実感の有無に応じて、〈感情〉のまま神に音声を伴う〈叫び〉を發した。さらに、受難のイエス・キリストへの敬心の高まりとともに、苦しむイエス・キリストや悲しむ聖母マリアへの共感にもとづく激しい〈泣き叫び〉を、日常的な信心業として定着させた。涙を伴うことで激しい〈叫び〉の〈救い〉に繋がる意味は強まった。

第二に、聖なるものや〈罪〉に繋がるものに対し、〈身体〉を通じて「反応」する〈叫び〉に新たな展開をもたらしたことである。〈罪〉となるものの存在によって上げてしまう〈叫び〉は、彼女ら自身の聖性の「しるし」となった。また、聖なるもの、たとえば死ぬ間際に明らかになる天国の心地好さや、神の恩寵などに触れた際に〈叫び〉を上げたが、激しかったため、悪魔憑き等の見方も残存した。だが、一部の人によって、あるいは前後の過程への視点が加わることで神によるものだと認められるようになった。

第三に、第一点目・第二点目で述べた神への訴えの〈叫び〉や「反応」の〈叫び〉を日常的に繰り返すことを、神との一体化という最終段階に至るまでの「過程」とする方法を見出したことである。〈身体〉を通じて神を求めた「敬虔な女性たち」において、〈叫び〉は、〈身体〉を用いた外的な行為であるとともに、内面をも変える「過程」を進むための行為として、〈救い〉に繋がるようになる。

第四に、神に向かって〈叫び〉を上げるのみならず、むしろ神から〈叫び〉を与えられ、さらには、神の〈叫び〉ないし〈泣き叫び〉となることによって、全てのキリスト教徒た

ちを<救い>に導く方法をも提示したことである。その<叫び>は「神の意図」を表し、聖母マリアの悲しみを人々に伝えるとともに、回心を促す役割も持った。

続いて第三章で明らかとなった、一般信徒を含む集団的な宗教運動における<叫び>の意味・役割の変容の特徴として三つ挙げられる。

第一に、<叫び>が、集団的な運動が見出され始める千年紀から中世末まで変わらず、<救い>に繋がる中心的な手段であり続けたことである。叫ぶ相手は神や聖母マリア、聖三位一体など運動によって異なるが、掲げられた十字架や歌など、運動の基本的な要素と並んで<叫び>は見られた。それは先述のように一般信徒にとって<叫び>が、神に繋がる基本的な手段だったからである。

第二に、<身体>を通じて神と関わる<霊性>が発展したことを背景に、神と繋がる方法に<叫び>以外のものが見出された結果、<叫び>が相対的に重要性を減じる場合が出てきたことである。鞭打ち業や<罪>に応じた姿勢で倒れる等の行為で、神との関わりを感じるようになるようになったため、<叫び>が消える。それまで<叫び>を<救い>に繋がる中心的な手段とした一般信徒による「民衆運動」の性格の強い第二期鞭打ち苦行運動においてこそ、その消滅も見てとれる。

第三に、神に繋がる<叫び>が、変わらず前面に出る集団的な宗教運動は中世末にも見られたが、その場合の<叫び>には、「敬虔な女性たち」が見出した<叫び>の第三のものと同様、神に向かう内的な体験の「過程」となる仕方を見出すことができたということである。展開する<叫び>が「敬虔な女性」個人のもと同じであることは、集団的な運動に表れる信心形態が個人化していることをも示している。中世終わりには一般信徒が<叫び>以外の仕方を見出したのみならず、集団で遠くの神に「叫ぶ」形態の集団自体が解体し、個々人が神と向き合うようになっていたのである。

最後に、第三の成果として全体の考察から明らかとなった、人間と神との関わり方の流れは以下である。まずは中世の当初より、単純に遠くの神に向かって願うための<叫び>、または聖遺物や聖人の存在などで一時的に上げる<叫び>が、神と繋がる<救い>の<叫び>の基本的なものであった。神は遠くにいたため叫びかけねばならず、また、その接触を思わず<叫び>で表現してしまうほど特別な存在だったのである。

続いて、神に呼びかけ神と接触する方法として、<身体>を通じた<霊性>の12世紀後半以降の展開のもと、鞭打ち業の血をイエス・キリストの流した血と同一視するなど、<叫び>以外の方法もあり得るようになると、上記の従来<叫び>は、それらの方法に取って代わられたため消滅に向かう。

ただし、予てからの神に向かって訴える<叫び>や、聖性との接触（神の恩寵の実感や逆にその不在の感覚）による<叫び>を「繰り返す」ことで、神と一体化（神と魂の結婚）し<沈黙>に至るまでの「過程」となる<叫び>が、「敬虔な女性たち」においても、集団的な宗教運動においても見られ、<救い>に繋がる役割を果たすようになっていた。裁きの神から赦しの神、そして受難に遭った人間イエス・キリストへとイメージが変化し神が

より身近になった所で、〈叫び〉は以前のように人間と高みにいる神とを真っ直ぐ一時的に繋ぐのではなく、最終的な、理想的な場所に向かう「過程」の行為となったわけである。さらには人間が神へ「叫ぶ」のみならず、むしろ神が人間に〈叫び〉を与える場合すらあった。

以上のように様相は変化したが、「叫ぶ」(“clamare”)行為は、人間と神とを繋ぎ続けた。人間が神の〈叫び〉になるのは、そのもっとも進んだ段階であり、それが見られた時期は〈救い〉の〈叫び〉の最盛期と言えよう。〈身体〉を通じた〈霊性〉の展開が顕著な盛期中世から中世終わりに焦点を当てた本論文は、その〈救い〉の〈叫び〉の最盛期に、〈叫び〉が神といっそう密接に結びつきながら人間と神を繋ぐ様子を多様な史料をもとに浮き彫りにしたものである。

なお、「最盛期」と述べたように、この後信心業のあり方が一般信徒も含め、より内的になり〈叫び〉は消滅する。それは〈身体〉を通じた〈霊性〉の終焉であり、信心形態自体の変容、宗教改革やルネサンスとも関わる問題である。この後続する時期の大きな出来事を考察する上でも、直前の時期の〈霊性〉のありようを〈叫び〉を通じて明らかにした本論文は有意義である。

その他、本論文の今後の展開として、より世俗的な〈叫び〉も含め、騎士道文学などの文学的史料も考察対象としながら、中世世界でコード化されていた〈感情〉の表現との関わりで研究を広める方向、および、神学者・哲学者らの〈叫び〉と〈沈黙〉を通じた神との結びつきを詳しく見る方向も考えられる。さらに、イタリアとドイツの地域差による〈叫び〉の性質の差異についても、より深く探究できよう。

以上のように、多様な展開の可能性を持つ本論文は、西洋史研究界全体に対して、〈叫び〉という新たな着眼点から一石を投じるものである。